Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2011, Vol.21, 209-214

論 文

鹿児島のよさを再発見し発信する外国語活動の授業づくり

園　田　愛　美〔鹿児島大学教育学部附属小学校〕

Classroom Planning of Foreign Language Activities on Rediscovering the Virtues of Kagoshima

SONODA Aimi

キーワード：外国語活動、言語や文化、体験的な理解、授業、郷土教育

1　研究の背景

小学校５・６年生の外国語活動が本年度より必修となった。本校では，平成５年度より１年生から週１時間の外国語活動を行っており，子どもは色々なゲーム活動等を通して，外国語に慣れ親しむことを楽しんでいる。しかし，子どもが普段使っていない外国語を使う必要感を感じ，高学年になっても，外国語がうまく話せるかを不安に感じることなく，コミュニケーションの楽しさを感じられるような授業づくりに課題を感じている。

> 1　外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ること。
> 2　日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めること。

そのためには，小学校外国語活動の内容のうち，２の「言語や文化の体験的な理解」の学習内容と指導方法を改善していくことが大切ではないかと考えた。

具体的には，子どもが，外国の人とのコミュニケーションを通して，外国の言語や文化とともに，自分の地域がもつ言語や文化のよさを感じることで，より学習が身近で必要感のあるものになるのではないかと考えた。そこで，自分たちの鹿児島のよさを外国の人に進んで伝えたくなるような外国語活動の学習内容，指導方法の在り方を研究したいと考え，研究主題を設定した。

2　研究の内容と方向

(1) 研究の内容

① 身近な地域の素材を教材化し，学習内容，指導方法の条件を明らかにする。

② 子どもが鹿児島のよさをとらえ，必要感をもって主体的に活動に取り組むための学習内容，指導方法の方向性を明らかにする。

(2) 研究の方法

① 子どもがこれまで行っている「買い物ゲーム」の学習内容を，地域のお土産を生かした教材を用いて行い，子どもの実態に即した学習内容や指導方法であったかを分析する。

② 授業実践を行い，子どもの授業の様子や感想を基に，地域の素材を生かした学習内容によって，外国の人とコミュニケーションを図るという意識や鹿児島と外国との言語や文化の違いや面白さへの気付きが高まったかを分析する。

3　鹿児島のよさを再発見し、発信する外国語活動の授業づくり

(1) 小学校６年単元「鹿児島のお土産をしょうかいしよう」

ア　実践の立場

本単元は，子どもたちが生活の中で目にしたことのある，外国からの観光客が鹿児島のお土産を買う場面を取り上げ，英語を使って鹿児島のお土産について紹介しながら売り買いする楽しさを味わい，臨場感をもって英語でのコミュニケーションのよさを味わうことをねらっている。また，お土産がその土地の文化を垣間見られるものであることから，外国の人に紹介する中で鹿児島の文化に対する気付きを得ることもねらっている。

このねらいに迫るために，鹿児島のお土産店の様子を再現し，臨場感のある環境づくりに心がけたい。また，これまで学習した「買い物ゲーム」の英語も活用して，外国の人とのお土

産店でのやりとりができるようにしたい。さらに，新しく使いたい言葉を，子どもが進んでＡＬＴに知りたいことを尋ねることができるように，助言をしていきたい。

具体的には，まず，ＡＬＴの出身地のお土産の話を聞いたり，世界の国の有名なお土産クイズに挑戦したりして，その土地の文化を垣間見られるお土産に対する興味・関心を高め，今度は鹿児島のお土産を外国の人に紹介したいという気持ちをもたせる。次に，鹿児島のお土産の紹介を考える活動を設定し，鹿児島のお土産について紹介する英語に慣れ親しんだり，話したい英語をＡＬＴに尋ねたりして，鹿児島のお土産店を開く準備をする。そして，後半の「鹿児島のお土産店ゲームをしよう」の活動で，お土産の売り買いを楽しむとともに，言えるようになったお土産の材料や食べ方，売り買いでの会話表現を確かめ合うことで，外国語を通してのコミュニケーションのよさや達成感を味わえるようにしていきたい。

そこで，本実践にあたっては，子どもたちが，鹿児島のお土産を売る場面で鹿児島のお土産について外国のお土産と比較しながらよさを感じたり，外国語を通して積極的にコミュニケーションを図ったりすることができるようにするために，地域の素材を生かし臨場感や必要感をいっそう高めることが大切であると考え，次のような観点で実践に対する考察を加えていくことにする。

観点１　鹿児島のお土産に対するよさを感じるような学習内容・指導方法の工夫ができたか。
観点２　子どもたちにとって外国語を使ってコミュニケーションを図ることが必要になるような学習内容・指導方法の工夫ができたか。

イ　単元の目標

(ｱ)「外国の人とコミュニケーションを図りたい。」という願いのもと，ＡＬＴやＪＴＥ，友達と協力しながらゲーム活動やスキットづくりに取り組む。

(ｲ) 外国と鹿児島の特産を生かしたお土産を比較し，言語や文化の相違点や共通点に気付き，その言葉の面白さ・豊かさ，多様なものの見方・考え方について理解する。

(ｳ) 食べ物を紹介する英語や買い物での英語に慣れ親しむ。

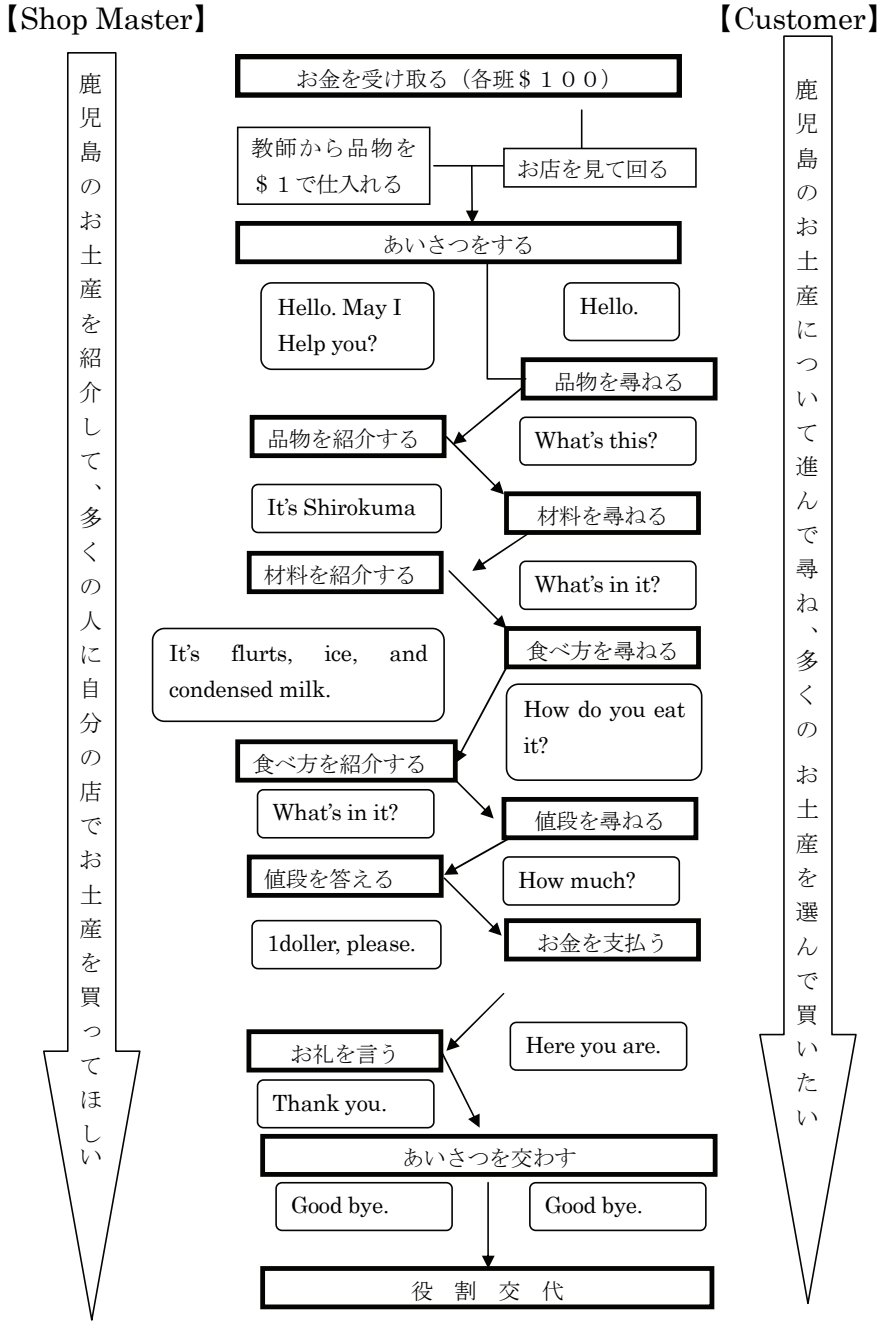
(ｴ) 鹿児島のお土産を紹介する場面で，よりよいコミュニケーションを図る工夫をしようとする。

ウ　単元の流れ

時間	過程	学習課題	主な学習活動
1	意欲をもつ	**世界のお土産クイズに挑戦しよう**	・　外国のお土産店のスキットやクイズから鹿児島のお土産を紹介する単元の目標をもつ。
2	つかむ	**鹿児島のお土産をしょうかいしよう**	・　鹿児島のお土産を英語で紹介する方法（英語，ジェスチャー等）を考える。
3		**もっと多くのお土産をしょうかいしよう**	・　班ごとに発表しよいところを参考に多くのお土産を紹介する練習をする。
4	挑戦する・広げる	**お土産店の準備をしよう**	・　お土産の picture card を作ったり店での会話を練習したりする。
5		**Shopping Game をしよう**	・　ゲームでお土産を紹介する。
6	振り返る	**鹿児島のお土産しょうかいをふり返ろう**	・　自分や友達の成長をふり返る。

4　鹿児島のよさを再発見し、発信する外国語動の授業の実際

(1) 活動の流れ（５／６時）



コミュニケーションの積極性の高まり
言語や文化に対する体験的な理解の深まり
買い物の英語や鹿児島のお土産を紹介する英語への慣れ親しみ

(2) 学習内容，指導方法の工夫

① 臨場感のある場の設定

拡大絵，ＢＧＭ（おはら節），ハッピ等でお土産店の店員になりきって意欲的な活動ができるようにした。

使った拡大絵と手作りハッピ

② 話す意欲が高まる場の設定

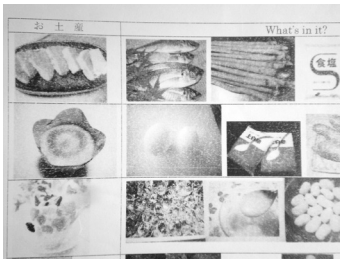
客は質問をたくさんするほど安い値段で買い物ができるルールにした。そのことで土産物店役の紹介の会話も広がり，活発に会話をすることができた。

積極的に買い物ゲームの中で会話をする児童

③ hint card やpicture cardを準備

お土産の品は，児童へのアンケートをもとに８つに絞り，児童がピクチャーカードを作成した。

児童が作ったカード



教師が作ったヒントカード

④ 相手意識を高める指導

鹿児島のお土産を紹介したいという店員の気持ちや，鹿児島のお土産を知りたいという客の気持ちに立った会話ができるように，実際のお店の写真等を見せたり，これまでの学習の中で気をつけていることを発表させたりした。

児童に見せた土産店の様子

(3) 実践の考察

【観点１】鹿児島のお土産に対するよさを感じるような学習内容・指導方法の工夫ができたか。

① 地域の素材である鹿児島のお土産に関する英語を取り扱った教材の準備

児童へのアンケートをもとに，鹿児島の有名なお土産を扱ったことで，それぞれの児童が，鹿児島のお土産について改めて気付いたり，思いを深めたりすることができていた。教師は，児童が平易な英語で安心感をもって鹿児島のお土産の紹介ができるように，語彙を絞り，写真で作ったhint card やpicture cardを準備した。写真で作ったカードを用いることで，子ども達が平易な英語「What’ this?」だけで，いろいろな英語をＡＬＴに聞くことができた。

② 鹿児島のお土産と外国のお土産を比較させた

第１時で，外国のお土産クイズに挑戦し，ＡＬＴが自国のお土産を紹介するのを見て，「自分たちも紹介したい」という意欲を高めることができた。そのクイズから，「お土産とは，その土地でとれる物や有名な物を使っているんだ」「お土産でその土地のことがわかるんだ」という気付きを得て，鹿児島のお土産と外国のお土産を単元を通して比べることで，鹿児島のお土産に対する特徴を考えることができ，もっと多くの人に知らせたいという意欲にもつながった。

【観点２】子どもたちにとって外国語を使ってコミュニケーションを図ることが必要になるような学習内容・指導方法の工夫ができたか。

① 臨場感のある会話づくりを行った

自分たちが知らないお土産を買うならどんなことを尋ねたいかを考えさせ，実際に行われるような会話ができるようにした。また，実際に鹿児島中央駅のお土産店を取材し，お店の人の話より，新幹線開通の影響で，海外からの観光客が増えたことや，宗教上の理由等で，お土産の材料や食べ方を尋ねられる機会があるのだということを児童に語り，臨場感をもって活動させるようにした。

② 相手意識をもたせる指導を行った

相手の目を見て話すようにする，ジェスチャーを活用する，丁寧にゆっくり話す等，外国の人と会話をするからこそ特に意識したいことを考えさせ，自分のコミュニケーションのめあてを決めてゲーム活動を行い，その課題を自己評価する形で，本時の活動を振り返らせた。実際に行われている場面をイメージできることで，外国の人に伝わる話し方をしようとするめあて設定がスムーズにでき，どの児童も自分のめあてに沿った自分のかんばりを実感することができた。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

研究を通して，設定した学習内容・指導方法から，言語や文化への体験的な理解を深め，それがさらなるコミュニケーションの積極性へとつながる児童の姿を見ることができた。

> 児童の振り返りより
> ・ 鹿児島のお土産には，「さつま」という鹿児島の昔の言い方や，「桜島」のように土地の名前が入っている物がある。外国のお土産や他の県のお土産のこともっと知ってみたい。
> ・ 鹿児島のお土産がどんな材料でできているか分かった。鹿児島の特産物を多く使っていると改めて分かった。英語で言えたので，これから外国の人に実際に紹介してみたい。
> ・ 鹿児島のお土産は，世界一大きい桜島大根や，世界一小さい桜島小みかん，日本一の生産量の黒豚などがあり，色々な人に知ってほしいいいところがたくさんあると思った。

また，本研究を県小学校外国語研究会夏季研修会で県下の先生方に御報告したところ，先生方のアイディアから，例えばお土産であっても，同じ鹿児島県でも全く異なるその土地ならではの文化が垣間見えることが分かった。地域の特色を外国語活動に生かすことは，自分たちのもつ「文化」の固有性，面白さを実感する契機になりそうだと言える。

(2) 課題

○ 研究が，文化や外国の文化に対する共感的な思いを高めることにつながっているか，子

どもの意識を継続的に見取っていく必要がある。

○　学びの達成感を高めるために，実際に外国の方ともっとふれあえる機会を設定していく必要がある。

【主な参考文献】

○　文部科学省「小学校学習指導要領」
（東洋館出版社，　平成20年）

○　文部科学省「小学校学習指導要領　外国語活動編」
（東洋館出版社，　平成20年）

○　兼重昇，直山木綿子「小学校　新学習指導要領の展開　外国語活動編」
（明治図書，平成20年）